
まなサポ京教

～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクトの概要など

1. 「まなサポ京教～中学生の学習支援～」

伏見区を中心に、子どもたちが安心して学習できる空間を作る活動を行う。

2. 代表者および構成員

・代表者

戸高雛 教育学専攻 2回生

・構成員

鳴橋杏里 国語領域専攻 3回生

松田凌 数学領域専攻 3回生

大倉海翔 技術領域専攻 3回生

深津勇斗 理科領域専攻 3回生

稲葉結 英語領域専攻 2回生

寺見紘奈 美術領域専攻 2回生

勘藤ちひろ 美術領域専攻 2回生

下村紀輝 社会領域専攻 1回生

河本壮平 理科領域専攻 1回生

宮元延祥 幼児教育専攻 1回生

3. 助言教員

伊藤悦子先生（教育学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

時間：毎週金曜日 18時～20時

場所：伏見いきいき市民活動センター

まなサポ京教の主たる活動はこの STUDY ONE という学習支援中心の放課後教室を開催することである。中学生を対象に呼びかけをし、学習に適した環境づくりを行う。子どもたちには、持参した宿題や用意している問題集など、それぞれが取り組む勉

強において、わからないところを教えたり、学習法を提示したりする。現在、中学生と高校生を合わせて5～6人程度の子どもたちが参加している。

STUDY ONE では、学習に適した環境づくりというものを意識した。決まった時間の中での学習の方が集中しやすいだろうという考えのもと、2時間という時間設定にした。ただし、休憩時間をこまめに設定し学習以外の時間も大切にするように心がけた。

また、藤森中学校の先生との連携も行っている。子どもへの声掛けを行ってもらい、情報共有をする、来なくなった子たちに声をかけてもらうなど、学校側と連絡を取り合うことでより子どもを包括的にサポートすることができた。

2. 他団体への視察

(1) 精華町「学びの広場」

精華町で行われている「学びの広場」を視察してきた。この活動は、精華町にある母子会（むつみ会）がはじめられた活動であり、ひとり親家庭の子どもたちを主な対象とし、食事や勉強、遊び等を行う場である。参加する子どもは、小学生から高校生ままで年齢が幅広く、小学生は二階、中高生は一階と空間を分けることで勉強と遊びを分けて、活動されていた。

「学びの広場」の概要をお話ししていただき、その後実際に活動の様子を見せていただいた。

(2) 八幡市「未来塾」

八幡市で行われている「未来塾」を視察してきた。八幡市の教育集会所にて、地域の子どもの学力向上を目指し、学校等と連携し行われている学習支援である。子どもの参加条件として何か制限を設けたりすることはなく、地域のすべての子どもたちに開放していることで、いつでも誰でも入ってきやすい、居場所とされている。

「未来塾」の概要をお話ししていただき、その後実際に活動の様子を見せていただいた。

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

STUDY ONE で子どもたちに勉強を教える中で、

子どもたちが自分で勉強に必要な環境を作るということに困難を抱えているということが分かった。

STUDY ONE に参加してくれている子ども達は勉強に苦手意識を覚えている子が多い。その影響か、勉強に対してどこか諦めているような自虐的な発言が目立つ。勉強するということがハードルを感じているということが分かった。また子どもの多くはスマートフォンを所持している。そのことにより調べ学習の際にスマートフォンを活用するという点ではよい影響を与えている。しかし、ゲームやSNSが気になり学習を中断してしまうというように、学習とスマートフォンとの区切りをつけることが難しい。さらに、原因は明確に分からないが筆記用具やプリントを用意するといった基本的な準備が難しい子もいる。自分で学習空間を作ることが苦手な子どもたちに週に一度とはいえ、勉強するための空間を作ることができたことは有意義であったと考える。

子どもたちの様子を見てみると、「したい」「する」「できる」が、繋がっていない様に感じた。子どもたちは、教師や保護者に強制されてSTUDY ONEに通っているわけではない。勉強に対してある程度の意欲があるからこそSTUDY ONE通ってくれる。ただ、だからといって、勉強するかといえば、それは別問題である。教室に来たものの、なかなか勉強を始められないということも多い。ようやく、勉強し始めても、できない問題ばかりが並ぶ宿題に手が止まる。勉強したいが、やる気が起きない。勉強し始めても、問題が解けない。悩む子どもたちを見た。そのような勉強への意欲のある子に対して、勉強に適した空間を提供したり、問題に解けない子に解けるようにサポートすることができた。ただ、勉強するための動機付けが難しい。宿題にできない問題が並んでいることを知っているからこそ、なかなか問題に取り組むことができない。意欲があるのに勉強のできない子どもに、どう勉強する気を起こさせるのかという問題を前に自身の力不足を感じた。

また、今年度は昨年度よりも藤森中学校との連携を強めたことで、よりスムーズに子どもたちと活動をつなげることができた。一方ですぐに去ってしまう子どももいる。教室から足が遠のいた子どもを追うべきかどうかは悩ましいポイントであると感じた。

去る者追わずではなくそういう場面でもサポートをする必要があるのではないかと考えた。

2. 他団体への視察

(1) 精華町「学びの広場」

「学びの広場」の視察を通して、居場所づくりの重要さが分かった。

単に勉強を教える学習塾のような場所では、子どもたちの足が遠のいてしまう。子どもたちにとって安心できる居場所があるからこそ、学習支援ができるということに気づいた。今年度、STUDY ONEに参加してくれたものの、途中でやめてしまった子どもがいる。一方、「学びの広場」では、途中でやめてしまう子は、ほとんどいないという。活動の様子を見せていただくと、子どもたちが勉強する空間は、教室ではなく、昼間はカフェとして営業されている空間であった。そのため雰囲気が温かく、STUDY ONEの淡泊な雰囲気とは違うものであった。

安心できる居場所づくりを、意識する必要があると考えた。

(2) 八幡市「未来塾」

「未来塾」の視察を通して、居場所づくりを行う上で「場所」の重要性が分かった。

「未来塾」が行われている建物は、社会福祉施設としての役割も担っているため、参加する子どもは場所に対して、慣れ親しむというハードルを越えている。そのため、子ども達は足を向けやすい。私たちも児童館にきている子どもたちをSTUDY ONEに繋げることで、「場所」に対するハードルを越えた子どもを支援できるのではないだろうかと考えた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

STUDY ONEの教室は週に一度しか開くことができなかった。たった週に二時間程度の活動で子どもたちの学力の向上に効果があったのか分からない。ただ、少なくとも週に一度子どもたちに学習する場を提供することができたという点では有意義な活動であったと考える。また、昨年度よりも藤森中学校とより連携し、子どもと活動をつなげることができた。さらに他団体の活動を見るなど、より良い教室

であるために何が必要かを考えることができ、よかったと考える。

一方、今年度は学習支援に傾きすぎた教室になってしまった。より良い教室が、より勉強しやすい教室ではない。子どもたちが安心でき、また来たいと思ってもらえる教室が私たちの目指す教室の在り方の一つである。学習支援のみの教室ではなく、居場所づくりの兼ね合いを考えた活動のあり方を考えていきたいと考える。また、今年度、子どもたちへの動機づけという課題が残った。今後、子どもたちが勉強するために何ができるのか考えていきたい。